
賊汝伝記

紅響香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賊汝伝記

【Nコード】

N6729F

【作者名】

紅響香

【あらすじ】

奴隸の少女が海賊となり、歌姫になった――。ひとりの歌姫の生きざまを魅よ。

序章

嫋々（じょうじょう）と草木をゆらす風が吹く。空気が澄んで青々とした蒼窮から降り注がれる陽光が、大地を少しばかり暖めた。丈の低い草むらが茂っている中に、小さな木彫りの椅子がひとつ置いてあり、一人の老婆が腰掛けている。周りには老婆を囲むように五、六人の子供たちが膝を抱え座っている。

老婆が微笑を浮かべながら、深緑の布に包まれた分厚い本を袋から取り出した。書物の表紙には黄金の刺繍糸で『賊汝伝記』と記されている。

「今日はなあに？」

と本に目を配りながら、一人の少女が大きな眼を輝かせて聞く。

「今日はね、三百年前くらいにいたある女性の物語でも話そうかと思ってるね。本を持って来たんだよ……」

老婆がそう返せば子供たちは、互いに見交わすと嬉々とした笑みを見せた。

「聞きたい！ 聞きたい！」

「はいはい、慌てないの」

子供たちからの催促に相槌を返した老婆は、本の表紙を捲った。

十六世紀後半――。

太平洋を中心とする世界中の海で、海上戦争の如く海賊の戦いがあつたことを知っているだろうか？

本来“海賊”とは島、沿岸を根拠地として武装した船で海を横行し、武力を用いて航行中の船や沿岸の町や村から収奪を行う勢力のことである。

収奪を行なった船の中には、無論、海軍のものもあり、海賊の存在はたちまち各国の国王の^{じだ}耳朶に触れ廻った。

それから数年経った後に、国と海賊の死闘が繰り広げられることとなる。

完全なる武装を遂げた海軍の船と、より優れた船を求めて収奪を繰り返す海賊の船とでは、早々に決着が着いた。

国家権力のもと、捕縛された海賊は、全てギロチンの刑になるはずであった。

しかし、それが免れたのである。その事件の背景には、一人の英雄の存在が浮き彫りとなった。

その英雄とは、ひとりの若い女海賊であり名は、タリムⅡロバースと言う。別名、海上の歌姫。

彼女の生涯は、誰も予想を覆すものであった。

アフリカの住民——たったそれだけの理由から幼い頃より“奴隷”として、労働を強いられてきた。ほぼ毎日、婦人のストレス発散の為に受けるむち打ちに、主人の娘からによる数々の拷問染みた卑劣な行為。

一日一日を死に物狂いで生き抜く彼女に、運命の歯車がゆっくりと動き出す。

ある日彼女の町を収奪しようと突如船から海賊が姿を現した。その奇抜な服装が特徴の彼らは、世間から数少ない“奴隷救出賊”と呼ばれている。

当然のことながら、タリムは海賊に身柄を保護された。だが、自由になった彼女は、自分の居場所がなくなったことに途方に暮れる。居場所が見つかるまで、との条件付きでしばらくの間、船で世話係として働いていたが、皆に恩返しをしたい、との想いからついに海賊として生涯を捧げる決意をする。

常に死と背中合わせの生活をしながらも、仲間との楽しい一時もあった。

だが、硝子にひび割れが生じると修復が不可能なように、両者の些細な意見の食い違いから仲間内において亀裂が走った。双方の怒りは日に日に増してゆき、そして……仲間同士の内戦にまで繋がっ

た。

何の報せもなく、忽然と起きた悲惨な事件にタリムの心が砕け散った。賊内で起きた内戦の敵方には、タリムが想いを告げていない密かに心を寄せる男がいた。

しかし、月日というものは遅いようで早く、彼女の精神が癒えきることも待たずに次の齒車が狂いだす。

「俺らの命の恩人のお姫様を捜す」

「お姫様って？」

次々と明かされる彼らの謎。海賊の過去にタリムの過去。そしてお姫様の行方。

全ての謎が解かれ、パズルの如くピースが全て組合わさった瞬間、齒車の動きは止まり終わりを告げる。

幾度も襲いくる運命に翻弄されながらも気高く生きた彼女は、『最強賊女』と称され、現代に生きる多くの海賊にも語り継がれている。

では、今からタリムの生涯を覗いてみようか……。

第一章―奴隷―

心地好い風が吹く春の季節。空も雲がひとつもない、晴天に恵まれた青空だ。

しかし、そんなうらかな日とはかけ離れた場所がひっそりと存在していた。そこは、この町――アミラ町の中心部に建っている林に囲まれた家のある一室だ。照り輝く日輪の陽射しさえも遮る、レンガだけで造られた部屋。窓越しに二つの薄暗い影がゆらりゆらりと動いている。

「ぎゃあっ！ あが！？」

と先刻から喉奥から搾り出すような声を上げる少女いた。彼女の叫喚がこだまする度に、その声音さえも引き裂く乾いた音が鳴り響く。

「お前みたいな愚図ぐずは、直ぐに殺されるんだよ！ 生きてるだけでも有難いと思いなさいっ！」

「あああっ！！」

一際大きな絶叫が響き、静寂が訪れた。人がいるのに人の気が感じられない、と言う異様な雰囲気醸しだしている。

太い縄が少女の体を締め付け、動きを封じており、想像を絶する苦痛から少女は悶絶した。そんな少女の体は、至るところに深手の傷を負っていた。傷痕の上に真新しい傷口が生まれ、鮮血が浮かび上がる。この少女は、この家の主人の妻――キャロルⅡスカッタに、むちで彼女の気が済むまでいたぶられた。気絶した少女の姿を愉快げに見下したキャロルは、一人せせら笑いながら部屋を後にした。

失神した少女の名は、タリムⅡロバース。今年で十五歳になるが、十になる前からこの家の奴隷として生活している。親の顔は一度も見ることがない。

毎日、主人たちから言われる仕事をこなしたところで、礼を言われることは一切ない。

タリムが掃除を終えたことをキャロルに伝えれば決まって良いほど、最終確認だ、と獲物を狩るチーターの眼の如くキャロルは、眼を鋭く光らせながら僅かな汚れも見落とさないようにする。もし汚れ見つければ、タリムに有無を言わせず今日のようなむち打ちを行う。その反対に、ひとつも汚れがなかった場合でも、むち打ちは行われる。

キャロルは日々募ってゆくストレスを少しでも発散したいが為に、何かと口実をつけてはタリムをいたぶる。例え口実がなくてもタリムに“奴隷”と言えば、好きに扱うことができる。いずれにせよ、タリムにむち打ちを逃れることは絶無に近い。

そもそも何故彼女が奴隷としての生活を余儀なくされているのか……。

答えは単純明快であり、人間としてはあまりにも酷い。それは――タリムが“アフリカの住民”と言うことに関連している。

この時代には、ヨーロッパを中心に“奴隷制”と云う社会制度が制定されていた。奴隷制とは、奴隷を生産労働の主な担ぎ手とする社会制度のことである。

奴隷の対象は主にアフリカの住民だ。奴隷は“奴隷海岸”と喚ばれる海岸を中心に、ヨーロッパの各国の間で“奴隷貿易”という形で売買されてきた。

この貿易は、十九世紀の米国のリンカーン元大統領による“奴隷解放宣言”が下されるまで盛んに行われた。

タリムもまた数多くの奴隷のひとつとして骨の髄まで賤られ、今の主人に買われたのである。

「……う、ん」

あれから随分時間が経ちタリムは、全身に襲いくる激痛に呻きながら目を醒ました。「い、たあ……っ」

タリムは、自分を縛りつけた状態のまま去ったキャロルの姿が脳裏に浮かび、軽く憤りが込み上げてきたが成す素手もない自分に悔

し涙を溢した。

痛む体を振り縄を解くと、血が乾き痂となった皮膚を眺める。

「肉まで裂けてる……」

眉をひそめながら傷口を指でそつと撫でた。一つひとつの傷は深くはあるが小さかった。深い傷口は、肉まで裂けた箇所が点々と見られる。痛々しい傷痕に目を背けたくなるが、タリムにすれば日常なのだ。むしろまだ良い方かもしれない。酷い時は痛みから一週間近くまともに動けない。

この部屋は今日のタリムの寝室となる。頻繁に受けるむち打ちの場所が違えば、寝室も違ってくる。

タリムは、近くにあった粗衣の目立つ布地をまとい横たえた。乾いていない血が布地に染みをつくった。彼女の体から溢れた人血が、床にまでとどまらず流れたのか床は生暖かい。鼻孔を突く血なまぐさい臭いに顔を歪めた。

「ずっとこのままなのかな……」

解放される日など無いに等しいと知りながらも、心の奥底で期待している。いつか鳥が翼を広げて空高く飛翔するように、自分も自由になるのではないのか、と。つまらない思考だ、と彼女は自嘲気味に笑った。

「暗いのってやっぱり嫌い……」

タリムにとって夜ほど怖いものはない。闇夜の中に包まれる、と言う理由もあるがそれ以前に悪夢にうなされる、と言う理由が主だ。が、寝なければ体が持たない。

良い夢が観られることを祈りながら瞼をとじた。

「……ん。……こ、こは？」

眠りから目を醒ましたタリムは、不可思議な現象に首を傾ける。レンガで造られた部屋ではなく、女の子なら誰もが憧れるであろう美しい花が咲き乱れた花畑にいたからだ。ほのかに香るラベンダーの匂いが、不安がるタリムの心を少しばかり落ち着かせた。

「どうして……」

が、心情に変化はなかった。

謎解きをする前に主人たちもいるのか、と思いタリムは彼らを捜す為にあちこち歩き回った。しかし、足の裏が痛くなるほど捜したが見つからなかった。来ていない、とそう捉えて謎解きをしようと花畑に身を投げる。

「夢なのかな？」

と呟くと右手の人差し指と中指でつねってみる。

「いっ!？」

彼女の想像を超える痛みが伴いタリムは、ぱつと跳ね上がるとつねった方の頬を擦る仕草を見せた。翡翠の瞳も涙腺が刺激され、多少淀んでいる。

——くす、ねえ……変な子がいるよ。

突如、不思議な美声が彼女の耳についた。それは彼女の耳朵をすり抜け脳天にまで響いた。

天候がにわかに変化するとともに、生ぬるい風が吹き始めた。風は徐々に強くなってゆき、たちまち烈風へと変貌を遂げる。

タリムが空を仰げば、雨曇りがいくつにも重なり、垂れこめていた。

「雨、降るかも……」

と暴風になびく胸までの金色の髪の毛を押さえながら言った。

今にも雨が降りそうな暗たんと動く雲空を眼前にし、タリムは少し慌てた様子を見せつつ雨宿りができそうな場所を探そうと腰を持ち上げようとした。しかし、起き上がれない。手足がざらりとした肌触りの“何か”に縛られている、そういう感触を覚えたタリムは、目線を恐る恐る下に向けた。

「っ!？」

生物の証いさもののしるしともいえる“声を出す”ことを、忘れてしまうほどの光景が面前に拡がっていた。無数にある花と花との間から太い茎が伸びており、彼女の手首、足首、太股などを重点的に絞めていた。

気持ちの悪い肌触りにタリムの気分がすぐれる。腕や足をじたばたと動かすが解かれることはなく、かえって複雑に絡まり、身動きをとることがより一層難しくなった。それでもなお、解こうと懸命に体をひねるタリムを見て花は、けらけら笑う。彼女は花の物笑いになった。

次第に茎と皮膚が擦れ合う箇所から新たな鮮血が流れ出る。

「解いてよっ！」

と苦痛に顔をしかめながら一喝するも花は、相も変わらず彼女を嘲笑う。

——怒ってるよお。

——おもしろいねえ。

——だって、奴隷のタリムだもん。

“奴隷のタリム”——その言葉が彼女の脳裏にこだますると同時に、彼女の肝が抉られた。幼い頃から言われ続けた言葉にすっかり聞き慣れたと思ったが、どうやら違うらしい。いや、“脳髓”では慣れたと認知していても、“心魂”まではしきれなかった。純真な幼心には、とても重く、受け止める以外の素手は持ち合わせていなかった。

「私はひとり。孤独。みんな、敵。仲間なんて要らない」

能面の如く無表情で同じ言葉を、タリムは呟き続けた。

——そうだよ。

——君は、ひとりさ。

——永遠に、ね。

花は彼女に賛同をしながら、更に太い茎で彼女の体を覆い尽くしてゆく。

そして再び暗闇の世界に包まれた刹那タリムは、ゆっくりと意識を失った。

——真っ暗闇の世界。その中で一人の幼い少女が蹲っている。鼻をすすり、泣き濡れた頬を膝で隠し、必死に声を殺そうとして時々

喉をつまらせながらむせび泣く。

タリムは、昔同じ境遇に経たされた経験があり慰めてあげようと足を運ばせた。だが一、二歩足を進め、立ち止まる。

「私だ……」

声を殺すことを止めて慟哭する少女は、幼い頃のタリムであった。どうりで同情できたわけだ、とタリムは口角を上げ冷笑に近い笑みで少女を熟視する。しかしタリムには、何故少女が泣いているのか判らなかった。

先ほどまで同情していた相手が自分自身と判った瞬間に、彼女の中から“慰める”と言う言葉が一瞬にして消えた。いくら幼い頃の自分がわんわん泣いているとはいえ、自分を慰める——その行為を彼女の自尊心が許さなかった。彼女自身、くだらない部分にプライドが高い自分に嫌気が差してるが、性格は簡単に変わることはできない。

この状況をどのように打破すれば良いのかも判らずタリムは、腕を組んで考えて込む。

——邪魔者。

——臭い。気持ち悪い。

ぼんやりと薄暗い光を放った数人の子供たちが、幼少のタリムに痛罵を浴びせながら現れた。

その子供たちから光が消え、くっきりと見えるようになった。タリムが漆黒の向こうに佇む子供たちを注視すれば、慄然し体が震え上がる。

「う、そ」

幼少のタリムに暴言を吐いていた子供たちとは、主人の娘——ミュー・スカッタやその友達であった。“友達”よりも“僕”に近い関係になる。娘——ミューを心底慕っているのか、彼女の命令には必ず従い、心服している。

ミューは普段、両親が不在の日中を利用し僕たちを家に招いては、タリムを暇つぶしの玩具として使っている。

その時の光景が目には浮かび上がり、相変わらず恐ろしさにおののくタリムに、一人の少年が気付いた。

「おい、玩具がここにもいるぞ」

と少年の発言に、ミューをはじめとするタリムの仇敵が彼女に振り返った。そして、入れ換わるように今度はタリムを囲い、数々の悪罵を浴びせた。

「暴言はやめて下さい！」

とタリムは戦慄き声にならないよう喉を押し殺し、子供たちを睨み据えながら反論する。しかし、彼女が自分たちに対して畏怖の念を抱いていることは当の昔に知っており、この反論もただの強がりだと言うことを直ぐに見抜いた。

「強がってんじゃねえよ」

「孤独のタリムちゃん」

「あんたは、ひとり」

子供たちの言葉が耳に入った刹那タリムは、耳を塞ぎ声が聞こえないようにするが、それは無駄な所作であり、彼女の耳には全て入っていた。

「やめて……お願い」

少し前の威勢はなくなり、涙目で弱々しい反論を送った。だが、独り言のような声音だった為に誰ひとりとして彼女の反論を聞いていない。

幼少の彼女と同じように、蹲り鼻をすすする仕草を見た子供たちは、腹を抱えて笑い崩れた。

「いや……嫌だ！ 嫌だ！」

叫び声を上げたタリム。突然のできごとに子供たちは、きょとんとするが一寸間を置くと再び笑い転げた。彼女自身パニックに陥り、何故あのような言葉を叫んだのか判らずにいる。

小馬鹿にする笑声が飛び交う中を、か細い声が鳴り響いた。タリムと子供たちがその方へ視線を動かすと、幼少のタリムが無情で冷然と佇んでいた。

「何よ？」

その表情が気に喰わないのかミュー＝スカッタは、腰に手を当て睨み据える。

「……そう……かわ……」

「あー、もうっ！ はつきりと喋りなさいよ！」　ぶつぶつと呟く彼女に痺れを切らし、ミューの金切り声が上がる。すると幼少のタリムは、泣いた後で真っ赤に腫れた瞼を瞬かせながら口角を上げ笑った。その笑みは哀愁を含んだ中に、哀れみを感じさせた。

「かわいそう……」

はつきりとした声調で囁いた言葉は、明らかにタリムに向けられたものだった。

「え……」

眼を左右に泳がせ狼狽える彼女に構わず、子供たちが幼少のタリムとともに“かわいそうコール”を手拍子に乗せて始めた。

「やめて……」

とタリムは涙声で懇願するが、より一層激しさが増した。

「かわいそう！　かわいそう！」

「いやあああっ」

堪えきれなくなったタリムは、胸が張り裂けんばかりの叫声を上げた。

——タリムは、夢から目を覚ました。

眼を限界まで見開き、跳ね上がるように上体を起こしたタリムの顔面は冷や汗でぐっしりと濡れていた。

薄暗いレンガの部屋にはタリムの甲高い悲鳴の残響と、荒い息遣いだけが響く。夢か現か幻か……、その区別が全く付かず、タリムは未だ震えが止まらない肩を抱いた。伸びた鋭い爪が肩に食い込むが、気にならなかった。むしろ、その痛みによって今は夢ではなく現なのだ、と判別した。

「そりゃ、そうだよね……、いきなり花畑にいるなんて」

と自身を嘲笑った。壁に身を預けて永遠の闇が続く天井を凝視す

る。

「でも、夢でもいいから安らぎが欲しかったなあ……」

と眼から流れる涙を拭いながら言った。堪えていた涙が溢れないよう、上を向いていたのだが、それは何の意味も成さなかった。頬を伝う涙が彼女の首を濡らす。

扉の向こうから、階段を駆け降りる足音が聞こえる。瞬時に婦人の音だと判り、手の甲で軽く拭うい、立ち上がった。

「タリム！」

と声を張り上げたキャロルは扉を開け入室した。

タリムは頭を下げ、

「おはようございます」

と挨拶をするがキャロルは、それに返答することなくしかめっ面をする。

「いつまで寝てるのよ！ 早く仕事をなさい！」

と真新しい傷痕がいくつもある褐色の頬を張っては、タリムに一言大喝した。

「申し訳ございません」

深々と上体を曲げたタリムを見下ろし舌打ちをすると、部屋を出て扉を閉めた。

扉から降り注がれる陽光がなくなり、眼の前がちかちかしてしまいタリムは眉をひそめた。

「行かなきゃ……」

一步この扉の向こうを踏み越えれば無限地獄のような、終わりのない奴隷の役目が待っている。できることならば、この場で地獄へ堕ちてでも行きたくない。だが、タリムに“死ぬ”と云う覚悟はない。行くしかないのだ。

タリムは気持を固め、扉を開けた。差し込む光を手で遮ぎながら、重い脚を一步、また一步と扉を越え階段を昇りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6729f/>

賊汝伝記

2010年11月23日00時56分発行